

チリのスペイン語の特徴 VOL.1

まずラテンアメリカのスペイン語の分類をみてみよう。

- ① カリブ海地域：キューバ、ドミニカ共和国、プエルトリコとベネズエラ・コロンビアのカリブ海岸
- ② 北・中米地域：アメリカ合衆国南西部、メキシコ、中米地域
- ③ アンデス地域：ベネズエラ・コロンビアのアンデス地域、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ北部
- ④ ラプラタ地域：アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ
- ⑤ チリ

Henríquez Ureña, "Observaciones sobre el español en América", *Revista de Filología Española*, 8, 1921

これを見るとチリは他の国のどの国とも違う独特なスペイン語を話していることがわかる。これは海と山によって他の国とはチリが隔離されたため独自のスペイン語を発達させたからである。それだけに止まらず社会階級の差が歴然としているこの国では階級によっても語彙や発音が違い、上流階級独特の発音と下層階級しか発音しない音がある。ここでは、社会言語学的な見地からチリのスペイン語を見てみたいと思う。

第一節 音韻的特徴(1) sch の発音

私がボランティアで数人のチリ人に日本語を教えていた時、彼等にとって発音しにくい日本語の音があることに気づいた。基本的にスペイン語と日本語は母音の数も同じで、子音に関しては日本人に発音しにくい音（例えば[j]や、[r]など）があるが、スペイン語を話す人にとっては日本語を発音することはそう難しくなくある。

チリ人が発音しにくかった日本語の音

Y

これはチリ人のみならずスペイン語圏の人々に共通してみられる特徴である。例えば、

「山田」→「じゃまだ」、「陽子」→「じょうこ」

「ヤンキー」→「ジャンキー」

彼等の頭の中では[d][y]が1つの音素のバリエーション(allophone)として存在しており、この二つの音の対立が日本語のように存在しない。しかし、これはスペイン語圏の話者全員に当てはまることなので特にチリだけの特徴ではないので、単に日本語では2つの phoneme であるのにスペイン語では1つの phoneme の2つの allophone となってしまうものもあるという例として用いた。

sch

本題に入ると日本語で1人称を「わたし」watashi と発音するが、チリ人の中にはこれを「わたち」watachi と発音する人が多くいる。また、「すし」を「すち」と発音することもチリにいる日本人の間では有名な現象である。何度も「し」であることを強調して発音を矯正しようとしたが、最後まで「ち」と発音し続けた人が多くいた。最初はチリ人にとって sh を発音することが難しいのかと思ったのだが、そうではないことが、何人かの informant と話すうちにわかった。

まずチリではどんな人がどんな時に s(c)h の発音をするのか調べてみた。

(インフォーマント) サンティアゴは階級によって明らかに住む場所が違うのでどこに住んでいるのかによってどの階級に属するのか大体わかる。それで、ここでは地域別、年齢は2つの層に分けてそれぞれのグループ5人ずつ、合計、30人の人と1時間ほど日常会話をし、最後に

En España, “coche” significa “un auto” pero en Chile, eso significa un vehículo para los bebés.

という問題の音が入っている文を朗読してもらった。この30人のインフォーマントは全てサンティアゴで、生まれ育った人にしぼり、他の地域から来てサンティアゴに住んでいる人は除外した。

インフォーマントの名前と年齢、職業

グループ a. Las Condes 在住の 10-30 代の男女 (上流階級)

Fiorella (24 歳、カトリカ大学卒、英語教師、翻訳業)
Teresa (30 歳、チリ大学卒、語学校経営)
Andrea (21 歳、チリ大医学部学生)
Juan (25 歳、カトリカ大学卒、ハーバード大学大学院生)
Macarena (36 歳、アナウンサー)

グループ b. Las Condes 在住の 40 代以上の男女 (上流階級)

María (主婦、60 歳、夫は会社役員)
Lele (会社役員、58 歳)
Mari (主婦、45 歳)
Lorenzo (72 歳、株式会社 Alusa 副社長)
Emma (55 歳、貿易会社経営、副業として不動産業)

グループ c. Providencia, Ñuñoa 在住の 10- 30 代の男女 (中流階級)

Jorge (27 歳、雑誌編集長)
Muriel (27 歳、カトリカ大学卒、英語教師)
Mauricio (24 歳、美大の学生)
Verónica (26 歳、主婦)
Jaime (23 歳、サンティアゴ大学学生)

グループ d. Providencia, Ñuñoa 在住の 40 代以上の男女 (中流階級)

Lidia (42 歳、チリ大学卒、スペイン語講師)
Boris (44 歳、カトリカ大学卒、不動産業従事)
Yuri (42 歳、チリ大学卒、スペイン語講師)
Fernando (45 歳、チリ大学卒、会社員)
Carolina (50 歳、高卒、会社員)

グループ e. Pudahuel, Maipú 在住の 10- 30 代の男女 (下層階級)

Luis (19 歳、バーガーキング勤務)
Sergio (19 歳、高卒、サルサバー勤務)
Manuel (21 歳、カトリカ大学学生)
Karen (25 歳、高卒、公務員)
Ximena (27 歳、カトリカ大学学生)

グループ f. Pudahuel, Maipú 在住の 40 代以上の男女（下層階級）

Tatiana（45 歳、メイド）

Urzula（49 歳、メイド）

Ana（50 歳、タクシー運転手）

Miguel（53 歳、高卒、マンション管理人）

Sergio（47 歳、ホテル受付）

sch が現れた割合

a. のグループ・・・5 人中 0 人（0%）

b. のグループ・・・5 人中 0 人（0%）

c. のグループ・・・5 人中 0 人（0%）

d. のグループ・・・5 人中 1 人（20%）

e. のグループ・・・5 人中 2 人（40%）

f. のグループ・・・5 人中 1 人（20%）

Chile, chao, coche など綴り上は ch で書き表されているところで、sch と発音するのは比較的下層階級の人であることがわかった。上流階級に行けば行くほどはっきり ch と s の入らない発音をし、場合によっては英語の t のように tsch と発音する。（上流階級はこの他に d も他の階級と違い英語、フランス語の d に近い音で発音する。また、上流階級は分かれる際に決して chao とは言わず adios と発音するがその際の発音はフランス語の adieu に似た発音となり d は英語の d と同じような音になるように強調して発音する。）

この sch という音スペイン語本来にはない音で、チリの先住民言語であるマプーチェの影響だという説があるが、確かにマプーチェにはこの音が存在する。（マプーチェ語の音韻の特徴はこの他、流音を含め、数多くの摩擦音が存在することである。）

チリの上流階級は clasista（階級主義者）である共に racista（人種差別主義者）でもある。この sch の発音は彼等にとってマプーチェ、下層階級を連想させるものであり、極力避けたい発音である。故に、英語を習っているチリ人の中流階級以上の人は、本当は sh の発音ができるにも関わらず station をステーションと ch の発音で発音しようとする。つまり、チリ人にとって、s(c)h と ch は同じ 1 つの音素のバリエーションであり、前述の y、j と同様に対立が存在しない allophone である。彼等にとって日本語の「かち」と「かし」は同じ音に聞こえるようである。日本人にとってこの 2 語の違いは明らかなのでなぜこれが同じ音に聞こえるのか不思議に思われるかも知れないが、これは日本語に [j] と [r] の対立が存在しないため日本人には ley と rey を聞き分けることが非常に難しいことに似ている。ある言語の特徴はその言語の話者が外国語を話す時に現れるが、チリ人の「し」の発音はまさにその例と言えよう。

しかし、日本人の場合と違うのはこの 1 つの音素のバリエーションは社会階級によって明確に使い分けられているという点である。つまり、sch と発音する方が下層階級なので中流階級以上の人が日本語を学ぶ場合に、日本語では「し」と「ち」が違う音であるということに気づかず極力この「し」という発音を避けようと「わたし」ではなく「私たち」と発音しようとする。（つまり、同じ音であれば洗練されたように聞こえる方が良いということであろうか。）

また、上記のグループの人々の他に幼稚園生、小学生などと会話した時もこの音が出てくるかどうか気をつけていたが、子供の場合この sch の音を発音する割合が比較的高かった。これは周りの大人がそう発音するのを真似た結果なのかそれともその方が子供にとって発音しやすかったからなのかよくわからなかったが、この音を発音した場合親や、年上の兄、姉は厳しく叱って矯正しようとしていたのでやはりこの sch と ch の二つの allophone に関しては分布にかなり社会的要因が含まれるようである。私がインタビューした人の中にはチリの不良グループがこの音をわざと使って会話し、彼等のアイデンティティーを示す一つの手段にもなってい

ると言う人もいた。確かに不良グループに関するテレビのドラマを見た時に役者がこの音を誇張して使っていた。これは日本で言えば、やくざ映画でやくざが威嚇する時に日本語にはない *rr* を使うことと似ているように思う。こういった音の使い方は非常に興味深い。

また今回のインフォーマントは全てサンティアゴ出身の人にしぼったが、地域的にはサンティアゴよりも北の都市、ラ・セレナや南のバルディビアに行った時の方が *sch* を発音する話者がたくさんいた。しかし、こういった地方都市にも上流階級は存在するが、上流階級の 90% がサンティアゴに在住しているので、階層ごとの比較は行っていない。

第二節 音韻的特徴(2) *tr* の発音

もう一つチリ人があまり好まない発音に摩擦音化した *r* がある。チリ人としばらく話していると *tr* の発音が他のスペイン語圏の人達の発音と違うことに気づく。この点に関しては多くの学者が言及しており、有名な事象となっている。

[*tr*] の音で、[*r*] の部分が無声の摩擦音になり、まるで英語の話者がスペイン語を話しているかのような感じでした。たとえば、*tres* 「3」、*cuatro* 「4」、*otro* 「別の」などが、英語の *tree* 「木」、の [*tr*] に近くなります。(上田博人)

最初は上田先生の指摘のように *cuatro, otro* のように *o* の音が後に続く語だけに現れる現象かと思いましたが、よく人々の会話を聞いていると *tbajaba, administracion, contribucion* など様々な母音の前でこの *r* の摩擦音が現れます。この *tr* の摩擦音もマプーチェ語の音の中にあるのでマプーチェの影響という可能性が考えられる。しかし、次のような引用がある。

「その後、アラウカノ語起源とされていた */r/* の摩擦音化は、弛緩の自然なプロセスであってアメリカ大陸のほぼ全域、(スペインの) ナバラ、アラゴン、アラバ、リオハでも記録されていることが明らかになった」

(Más tarde se ha demostrado que la conversión de */r/* en fricativa, señalada como *araucanismo* es un proceso de relajación espontanea que se registra en casi toda América y en Navarra, Aragón, Alava y Rioja.)

上田博人ホームページより

他の地域でもこの現象が見られるのであれば、マプーチェの直接的影響とは考えにくいですが、少なくとも引き金になっていることはあり得るのではないかと考える。

さて、前述の *sch* に関しても一般チリ人の評判はよくないが、この *tr* に関して言及すると大抵の人は “¡Me carga!” (嫌悪感をもよおす) と口をそろえて言うが、こちらはどの程度階級的に分布の差があるのかみてみよう。

ここでも先ほどと同じインフォーマントとの会話をデータとして用いる。ここでは最後に次の文を朗読してもらった。

En el metro, hay que tener mucho cuidado de no molestar a otros, es que en Chile es posible que te reten.

tr が現れた割合

- a.のグループ・・・5人中1人 (20%)
- b.のグループ・・・5人中1人 (20%)
- c.のグループ・・・5人中2人 (40%)
- d.のグループ・・・5人中2人 (40%)
- e.のグループ・・・5人中3人 (60%)
- f.のグループ・・・5人中2人 (40%)

これを見ると上流階級ではやや少な目であるが、全ての階級にこの音は現れている。これに関して、下層階級のインフォーマント Ximena は自分はこの音を発音しないが、自分の母親が家に帰ってきた時 "Hoy trabajaba mucho." とこの音を使って発音しようものなら母親にきちんと発音するようときつく注意するのだと言っていたので、チリ人もこの音はあまり洗練された音ではないと思っているようであるが、先ほどの sch ほどの強烈な嫌悪感はなく、チリのスペイン語の特徴として定着している。

第三節 音韻的特徴(3) pues, pue, po

チリは他のいくつかのラテンアメリカの国と同様植民者であるスペインのアンダルシア方言の影響を受けて s を語末、音節末で、省略する。

S → O / (C)VC / (C)V #

省略されない場合 (CV)V (CV)

チリ人の会話を聞くと文末で po という音がよく出てくるが、これは何かとチリ人に聞くと pues の s が省略され pue となり、その後 po になったのだと答える。しかし、この pue、po はスペインで言葉につまった時使われる pues... (ええと。。。) という表現とは全く違い、どちらかというスペイン人が "...eh!" と強調する時に文末につける eh と使い方が似ている。チリ人は強調したい時にスペインのように eh を使うことはなく、pue、po を用いる。また、スペイン人の eh ほど語調がきつなくもっと頻繁に用いている。例えば、"Hola, ¿cómo estás?" "¡Bien, po!", あるいは "¿Cuándo me ayuda?" "Cuando venga, po." と言った具合です。特に ¡Sí po!, No po!, Ya po! というのは典型的なチリ人的言い回しで、これを外国人が言うと Muy chileno! と周りの大きな反響が得られるが、上流階級の年輩の人々は少し眉をひそめ、「もっときれいなスペイン語を覚えてください」と注意される。これに若者語の "¿Cachai?" (「わかった?」「だよね?」に相当) などをつけて話したら上流階級の人々は頭を抱えてしまうに違いない。そこでこの典型的なチリ人的言い回しであり、発音である pue、po がどのくらいの頻度で現れるのか階級別にやはり調べてみた。(北の方ではボリビアやペルーの影響を受けて pues と s をしっかり発音したり、人によっては po ではなく pu と発音する人もいるが、ここではサンティアゴのインフォーマントにしぼり、po と pue に焦点をあて、調べてみた。

pue, po が会話中に頻繁に現れた割合。

- a.のグループ・・・ pue:5人中0人 (0%) po: 5人中2人 (40%)
- b.のグループ・・・ pue:5人中3人 (60%) po: 5人中1人 (20%)
- c.のグループ・・・ pue:5人中1人 (0%) po: 5人中5人 (100%)
- d.のグループ・・・ pue:5人中2人 (40%) po: 5人中4人 (80%)

e.のグループ・・・ pue:5人中0人 (0%) po: 5人中4人 (80%)

f.のグループ・・・ pue:5人中2人 (40%) po: 5人中5人 (100%)

poに比べると pueの方が比較的落ち着いた表現であるとされるのか上流階級の年輩者は poは決して使わなくても、pueは強調語として割と頻繁に会話で使っていた。逆に若者は上流階級であっても pueを使う人はほとんどいなかった。ある若者に聞いたところ「pueを使うのは田舎者だけ」という答えが得られ、やはり、若者にはあまり馴染まない表現のようである。しかし、20代のキャスターが朝のワイドショーなど比較的くだけた番組で po同様 pueを連発していたので、決して若い人でも pueと発音しないわけではないようである。さらに、ここに挙げたインフォーマントの他にどんな人が pueを使っているのか注意して会話に耳を傾けてみた。

◎pueを使った人

幼稚園バスの運転手が保護者に向かって : Hasta mañana, pue.

上流階級の人が娘の友達に向かって : Queda más arriba, pue.

幼稚園の保母が子供に向かって : Hay que comerlo, pue.

メイドさんが客人に向かって : A usted, pue.

このように pueを使うのは ustedに向かってであることが多いので、やはり poに比べるとやや改まった大人の発音と言えそうである。また、幼稚園の場合などは poではなく、pueを使って子供に話しかけているようである。

また、会話を聞いていると poと pueの両方を使う人達のうち比較的否定表現の強調に pueを使う傾向がある人もいたが、必ずしも否定=pueというデータは得られなかった。

また上流階級の場合両親に向かって poを使うと叱られるので両親との会話には決して poを使わないようにしていると言う女性(24歳)もいた。彼女は友達である私との会話でもほとんど poは使わなかった。これは私が外国人であったせいかもしれない。日本人でもネイティブでない人には「です」「ます」調で話すことと似ている。また彼女の場合 pueも決して使うことがない。(ちなみに彼女の母は poは使わないが、pueは使う。)

ここまでネイティブチェックを行ってきたのであるが、一つ大きな問題に気づいた。と言うのは今までのインフォーマントを用いた調査において会話の相手がみな外国人である私であったということである。チリ人は日本人と同様、誰とどんな状況で話をしているのかということに敏感で、上下関係にも気遣うという点が日本人とよく似ていて、かかる病気も胃ガン、胆嚢など日本人と同じ病気がよく観られるといい、新潟大学などではチリ大学と共同のプロジェクトを組んで共同研究をしているそうである。

そこで、今までのインタビューだけでは不足であるということに気づき、今度は前述のインフォーマント、あるいはその他の人々の会話に耳を傾けるという作業をしばらく行ってみた。この場合私は決して会話に入らず、チリ人同士の会話をいわゆる「盗み聞き」した。外国人が入ることによってチリ人の話し方が変わってしまうことを恐れたからである。

調査した状況

1. Las Condesの幼稚園(上流階級の地域)の父母会での父母達の会話(ここは超高級住宅街といわれる Dehesaの子供も何人かいる。)

2. 同年代の親戚、友達同士の会話(全ての階級)

3. 大学のカフェテリアで同席した学生達の会話

4. 車で家まで夫婦、恋人同士などに送ってもらった時に後部座席で、聞いた前部座席の二人の会話。（上流階級、中流階級、下層階級全てに関して1~2組ずつ調査）

こういった親しい間柄の人々の会話に耳を傾けることによって気づいたのは上流階級の人々の話し方が相手によってかなり違うということである。1. の父母会においては周りの気取ったお母さん方も同じチリ人同士で話している時は ¡Sí po! ¡No po! を連発していた。

また、前述の上流階級の女性（24歳）は私や目上の人と話している時はほとんど po を使わなかったが、同年代の友人や従姉妹と話している時は po を連発していたばかりか、cachai? も頻繁に用いていた。

また上流階級の年輩者の中にも先ほどのインタビューの時には決して po を使わなかったのに自分の兄弟、姉妹と話す時には po を使って話している人がいた。また、後で tu よりももっと親しい間で使う活用について述べるが、私とのインタビューでこの用法を用いていたのは30人中2人（ともに20代）だけだったが、2、3、4の会話などではこの用法をかなり用いていた。（さすがに1の状況ではこれは聞かれなかった。）下層階級、中流階級に関しては私と話している時と彼等同士の会話を比べた時、poの頻度はほとんど変わらなかった。こういった人々は相手が外国人でも普段友達と話しているままのスタイルを崩すことなく、語彙も外国人に合わせることなくチリのモディスモを頻繁に用いて会話していた。ちなみに前に挙げた二つの音、sch、trに関してはこういった親しい間柄の会話とインタビューの中の発音を比べた時各階級とも比率に変化はなかった。

こうしてみるとチリ人というのはスペイン人などと比べると社会的な状況に敏感であり、誰とどんな状況で話しているのかをいつも念頭に置いているという点が日本人と似ているということ、そして、3つの階級に分けた場合特に上流階級においてこれが、顕著に観られるということがわかった。

【この記事は日智商工会議所会報192号（2003年7月号）に掲載されました】